Ⅰ、総会の意義と課題

再建「労働大学」20周年を、大きな一歩に

労大運動とは大衆学習運動である

2023年6月11日（日）に開催された「労働大学再建20周年記念集会」で再確認された「労大運動とは大衆学習運動である」という本質的意義を理解することが大切です。

1979年、労働大学結成25周年集会に全国から3000人を結集して、それまでの総括にたって「労大運動とは大衆学習運動である」という方針を確認し合いました。大衆学習運動とは、具体的には「学習と相互討論」の積み重ねです。

今回の20周年集会で須藤学長から、労働大学のこれまでの歴史を総括し提案された内容は、まさに階級及び階級闘争としての労働大学・大衆学習運動の重要性・必要性です。

学習会は、続けることが何よりも大切です。学習会は、ただ学習するというだけでなく、大事なことは学習活動、相互討論を通して参加している仲間が同志意識を持つようになり、運動の中で協力して活動するようになります。各人の個性を生かす協力体制の中から、そのように変化・成長して組織的な力に発展します。

マルクス主義は、労働者の思想

それでは何を学ぶのか、それは科学的社会主義思想、マルクス・レーニン主義です。資本主義社会の具体的な現象から本質を見抜くことを学ぶには、マルクス主義の他にないのです。マルクス主義は、額に汗して働く労働者の思想だからです。

現在の資本主義社会の矛盾が、どこから出てきているのか、資本主義とはどんなに冷酷なものか、合理化とは何か、労働者はなぜ組織的に結集しなければならないのか、等を理解し合うようになります。マルクス主義は、もっとも人間性を大切にする思想です。

今日の社会の変革には、労働者階級が中心とならなければならないことを自覚するようになります。労働者階級の歴史的な任務です。

真の労働大学再建の力に

2003年11月24日、「労働大学再建集会」が、坂牛哲郎学長の下に全国から結集しました。その意義と課題として、①科学的社会主義の追及、理論と実践の統一を追求していく。②職場抵抗闘争を軸とした、階級的労働運動の追及、反「連合」の立場に立つ態度を明確にし、闘う労働者と共に歩むこと。③労大再建の主体は、友の会運動・大衆学習運動であり、それと一体となってすすめる。以上3点を意思統一すると共に『月刊まなぶ』発刊を確認し合いました。2004年1月創刊号として『月刊まなぶ』を誕生させることが出来ました。

第1回労働大学総会は、2004年11月23日、文京区民センターに全国から結集し困難を乗り越えて、大きな一歩を踏み出しました。そして、坂牛哲郎学長の著書『社会を変える、自分を変える』出版を記念する場ともなりました。総学習運動への提起でした。

労働大学の果たす役割

私たち労働大学の任務は、マルクス・レーニン主義思想をまなび、広めることです。全国の職場と地域に大衆学習運動、総学習運動を組織することです。

具体的には、全国各地で取り組まれている大衆学習運動としての「労働大学まなぶ友の会運動」の強化・拡大です。資本に対する怒りを組織する『月刊まなぶ』拡大運動です。これらの運動を通して培われた「相互討論」による人間としての成長、労働者階級としての自覚と誇りです。私たちは、しっかりと根を伸ばし、根を張り、粘り強く寄り添い仲間を組織することです。

私たちの基調「四つの課題を三つに学ぶ」を換言すれば、私たち労働者は、唯物史観と『資本論』に学び、労働者階級の歴史的使命を自覚し、科学的社会主義に不動の確信をもって生き抜く人間になろう、ということです。

目指すは、人間性回復、人間解放

労働者の哲学はまず、労働者が労働者であることに誇りをもつというところから出発します。目指すは人間性回復、人間解放のたたかいであり労働者の世界観を持つことです。社会主義運動、労働運動は、私たち自身と仲間との「人間性回復」あるいは「人間性を高める」たたかいであるということです。

人は、徹底的に考えぬき、全力をあげて努力したとき、どんな困難にも負けない力を身につけることができる、と言われています。その源は、資本に対する怒りです。階級及び階級闘争を自覚することであり、資本主義的常識を打ち破り可能性を高める努力です。

私たちは、これからもゆるぎない確信をもってたたかいぬく決意です。焦ることなく、亀の一歩一歩の前進を仲間と共に着実にはかることです。

坂牛哲郎前学長の遺志を引き継ぎ「マルクス主義は額に汗して働く労働者思想」であることを確認しあい前進します。